

たより

『美紗の会』

ニュース

第十一号

平成四年三月二十日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

第一回 おひきぞめ 雪降りしきる 芝白金に集う 三十人の同好の士



唄に舞う窓外の雪

二十五年振りの大雪に見舞われた東京。朝から降り始めた雪は身近くには二十センチ近くまで積り山手線も止まるとのニュースが流れる。

それでも、真っ白に化粧された街を熱心な弟子たちは三々五々白い息を吐きながら白金台の福祉会館へ。今年はお宅前の会場だからとお弟子さんのため、前夜から例年にも増して料理の腕を振るって準備をした師匠のお母さんは皆の姿を見て感激。勿論、嬉し涙で一番感激したのは師匠その人であったことは当然。心配された大きな遅れもなく二時には恒例の白扇で幕開け。前座の十番も淡々と進み、増田眞知子さんの『秋ききょう』から本番に入る。眞知子

さんは最近、閑崎ひで女師のもとで地唄舞の稽古を始めたとか。唄にもますます磨きがかかる。

外はしんと降り雪、川辺さんも負けじと『雪のなるま』を披露。本当はこの日は本郷氏が『嘘とまこと』を唄うことになっており、川辺さんの唄う『嘘とまこと』との競演を楽しみにしていた者も多かったはずだが、彼は残念ながら、雪による数少ない足留め組になり、会場に姿を見せる事ができなかった。他の雪被害組は嘉本、大久保、齋藤など。後から会の盛況と、美味な料理の話の聞き惚れやむ事しきり。

続く山根さんは先ず『宇治茶』で喉を、『玉川』では飛田さんの唄に合わせ地を引く。何時も笑顔絶やさない魅力

的な看護婦さんだ。今年の司会は先生の妹、康枝さん。その康枝さんから最近、千葉の会社の診療所を任せられるようになったとの紹介があり、誰もが笑顔の底にある頑張りを感じる。

育つ若手 円熟するベテラン

飛田さんの落ち着きのある唄『我がもの』『玉川』はさすがベテラン本格派の風格。さて美紗の会アイドルの龍也君ももう中学三年生、今年からはプログラムの名前も篠崎君となり、忙しい学業、スポーツの合間を割き参加『うもり』『河太郎』を唄う。大西氏は相変わらずの器用な唄い、飄々と『空ほの暗き』『辰己よいとこ』を披露。

美女々々コンビの松岡・藤井さんは今年も地唄の名曲『黒髪』を弾き唄い上げ会場にしっとりした雰囲気漂わせる。横濱の三階氏の世慣れた唄はすでに全員知るところ。

今年「江戸は隅田」から くり」で自慢の喉を披露。 長唄は 『娘道成寺』

美紗の会恒例最大の呼び物長唄、今年はいよいよ『娘道成寺』岡崎・田中のベテランに美女々々コンビの松岡・藤井の絶妙の組み合わせ。会場もしばし聞き惚れる。

『娘道成寺』の大曲に一同疲れたところで、小高氏が『浜町河岸』『湯上がり』で軽妙な喉を披露。続いて増田・岡崎の老練組が『夢の柳橋』と『雪の十日町』の渋いところで會員の部ののりを勤める

る佐久間会長の『春浅き』『夕暮』にバトンタッチ。佐久間会長は、師匠と増田さんの糸で飄々としながら味のあつる唄い。さすがと一同を唸らせる。

これまた恒例となった菊音さんの友情出演、今年も『吉三節分』と『初雪』。『初雪』には飛田さん即ち花柳千寿文師匠が踊りを付けられる。そして、全員が楽しみにするおとりの布唄師匠の唄と三弦、立方・花柳千寿文師匠で『今朝の雨』。一同兩師の至芸に時を忘れる。今年も演奏後の宴会が何時もより盛り上がったのは、外

ごあいさつ

会主 西松布味

平成六年も桃の節句が過ぎ梅便りが聞かれ沈下花の甘い香りがあたりを包み、春の気配の今日この頃を思うと、二月二十日の大雪の日のおひきぞめが遠い日のごさいます。私の会はいつも前日は波乱万丈で、どうなることかと気をもみますが当日になると雨も雪もやんでしまうので今回もきつと大丈夫と思っておりましたが今度は何

度空を眺めても降り続くばかりで、今年も多難な年になる

の大雪のせいだろうか、雪の中を出かけてくれたお客さんのせいだろうか。折から滞日中の、我々にも御馴染みのアマースト大学のソルト先生は特に最初から熱心に傍聴して下さり、「自分は音痴のくせに無謀にも美紗の会に入れてもらったがこんなに楽しい会であることを知り、入会して良かったと思っています。二十回目のおきぞめは是非アメリカで」と挨拶。やんやの喝采を浴びる。その他宇田さん、池沢さん、安倉さんなど客人に続いて、會員それぞれ一言ずつ挨拶。音もなく降り雪を窓の外に暮は盛り上がった。

来ました。そして思うことは、やはり歴史の重み、時の流れの大切さといったことでした。そして私の取り組んでいる音楽は心のルーツを探ると共に日々の心と稽古の積み重ねが大切と思うようになりました。時代と共に生きながらも「温故知新」の気持ち忘れず謙虚に生きてゆきたいと思えます。遅まきながら昨年は皆様のお力をいただいた、長年の夢でございました。『ぽん丸船上演奏会』を催すことが出来まして改めて『美紗の会』の方々はじめ多くの方々の愛顧を心から感謝しております。

佐久間 俊治

天気予報が連休は大雪と云っていたが、あてにならないので三日間の過し方として、十一日の紀元節(古いね)はゴルフ、十二日は小唄の会、十三日は宴参りと決めていた。早いもので妻が逝つてもう五年になる。

結果的には一日目のゴルフは無事終つたが二日目のおひき初はご存知の大雪山、三日目の宴参りは運転が危険ということでキャンセルになってしまった。

さて当日は朝から雪が景気

船上演奏会の記

豪華客船「にっぽん丸」での船上演奏会は成功裡に終つた。美紗の会の皆さんや司会の浅野さんのご尽力で二百名を越える人々の参加があり、売上げや収支面では予想外の成功と云えよう。参加者の殆どの方から西松布味先生を初め出演者の演奏が素晴らしいとの賛辞を頂いている。仕掛人の一人として喜しく思っていると共にご協力頂いた方々に心からお礼申し上げたい。しかし反省すべき点も少なからずあった。今後の参考のために列記すると、

- 一、演奏会場(座る場所)よつては(空調機器の雑音)が気になってせつつかくの名演奏を聞きづらい人がいたこと
- 二、パーティ会場では以上の人が殺到したので料理がすぐになくなり、追加が間に合わない印象を与えたこと
- 三、その他

- 一、受付がやや狭い印象を与えた
- 二、本船案内係りが少なかつた
- 三、美紗の会の皆さんご協力本当にありがとうございました。(本郷公基記)

へ出た方が早いのだが地下鉄なら雪に強いだろうと遠回りした次第。

新宿までは順調に来たが山手線がアウト。でも折角ここまで来たのだからしばらく待つてやれと小田急地下街のそば屋へ入つて焼酎のお湯割り飲み始める。昼前の一杯は美味いもんだな。新宿にはい、そば屋がないと思つていたが、こ、は結構いける。

一杯目を飲んでからオヤジに聞くと山手線はまだだめですと云う。映画でも見て帰つちまおうかと一瞬考えたが師匠の「しっかりお稽古しておいて下さいね」というテロップ

のやさしい声を思い出して気を取り直し地下鉄を乗り継いで恵比寿へ向かう。

霞ヶ関で日比谷線に乗り換えるという、何のことはない毎日の通勤ルートである。恵比寿に着くと雪はますます激しく降っているが、電車は片側だけ動いており、やっと目黒駅に向けて山手線に乗り換える頃はもう一時過ぎである。

目黒駅から会場までは年に一、二度しか履かないゴム長に任せて歩きに歩く。迎賓館を通過する頃が一番激しく降つていたようだ。

大雪の中を歩いていると三〇年前の三月末のことを思い出した。娘達がまだ幼かった頃、伊東にある会社の保養所へ家族で出かけた時のこと、北海道線の電車で閉じ込められ、朝伊東を出たのに、東京に着いたのは夕方の六時頃になつてしまった。ところが今度は中央線も総武線も地下鉄丸の内線も不通で、奇跡的に動いていた東西線で夜一〇時頃赤窪駅まで辿り着いた。

勿論バスも電車もないので私が二女を背負い、父が長女を連れワイフが母の手を引いて、ヨチヨチと雪の夜道を三〇分以上歩いて帰った。間の悪いことに、途中の坂道で母が転び頭を打つてのびてしまった。参つたね全く。

やっと助け起して夢遊病者のような母の手を引いて家へ帰り着いたが、母はそれからしばらく寝込んでしまい、春先の旅行にはそれ以来誘つても付いて来なくなった。

新たな国際交流

タイでミニコン

一月六日タイ国バンコクのセンチュリープラザホテルで西松布味師のミニコンサートが開かれた。北米・ベルリンのような大規模な演奏会ではなかったが集まった聴衆は古典芸術と詩を愛好する文化人達で、地元の新聞も日本の古典芸能の演奏家西松布味が本格的な演奏でバンコクの芸術愛好家を魅了したと賞賛の記事を掲載している。

上つたのは小生と非常勤の大西君だけという結果になった。まあこれも良い思い出になるだろう。

演奏は「夢の柳橋」を含む布味師の五曲の弾き唄いで幕を開けた。次いで同行したアマースト大学のジョン・ソルト教授が師の三味線に合わせ自作の詩を朗読。そしてこのミニコンサートを企画開催したタイ世界詩協会会長モントリ・ウマヒジャニ氏が日本語で得た印象をもとに作った詩を三味線の伴奏で披露。最後は再び師匠が自作の唄を含む三曲を演奏して、この国際性豊かな特色ある演奏会は大きな拍手の内に幕を閉じた。

編集雑記

- * 美紗の会の会員の間でも話題になった『マディソン郡の橋』の主人公、写真家ロバート・キンケイドの言葉
- * 分析は全体をだいたいにする。ある種のもの、魔術的なものは、全体として見なければならぬ。個々の断片を見れば、それは消えてしまふんだ
- * 現代人と称するわれわれ
- * はややもすると、些細なことに拘泥し、全体としての美しさに、意味を見失っていることがないか
- * 以前にも書いたが、西松文一師は唄は技巧ではなく、心だと云っておられる
- * 「たより」の発行が遅れ勝ちになり申し訳なく思っている
- * 追い立てられるようなお便りを頂ければ、それも励みになるのだが (た)